



『忘れ得ぬ言葉 私が出会った37人』
岩波書店 一九八〇年
鎌田 慧 著

三里塚

「闘争は芸術の宝庫」。誰か高名な芸術家の言葉ではない。戸村一作三里塚芝山連合空港反対同盟委員長。三里塚のキリスト教会の家系に生まれ、農機具を商う傍ら、鉄製彫刻、絵画に打ち込んだ。『新日本文学』に小説を書く。その時の編集者が本書の著者だ。著者は三里塚に通い、デモ隊の中に高木仁三郎（のちに原子力資料情報室）を見つける。「これ以上、科



忘れ得ぬ言葉

私が出会った37人
鎌田 慧

グラビア	地域を支える人 安達祐介さん・福島県	1
発掘！地域の希望のタネ	〈HAKKO OOSHIKA〉長野県大鹿村	5
給食のじかん	〈手作りいちごジャム〉岐阜県多治見市	佐藤久美 6
書評	鎌田 慧 著『忘れ得ぬ言葉 私が出会った37人』	菅原敏夫 8
焦点	LGBT理解増進法の成立過程から見えた課題	石川大我 10

特集 個人情報とどうつきあうか

	個人情報と地域社会 —情報連携による協働の仕組みづくりとその課題	村井祐一 18
インタビュー	災害時要援護者情報を地域で共有する —横浜市都筑区「つづき そなえ」の取り組み	林 昂輝 29 那須恵子
	気になるこどもと家庭を地域で見守り支える —フードパントリーの活動から	草場澄江 35
インタビュー	困難を抱える人を地域で受け入れ支える —岡山県総社市の取り組み	片岡聡一 40
	教育データの利活用をめぐる憲法上の課題 —とくに内心の自由の観点から	森口千弘 46
	真鶴町・選挙人名簿の不正利用問題をめぐって —うねりと呼んだ第三者委員会報告と海に生きる町民気質	西岡聖雄 56
地域おこし協力隊が行く!	第6回「棚田」を軸に農村コミュニティの再構築をはかる—岡山県美作市	水柿大地 64
自治研活動レポート	単組での自治研活動の活性化を! —2023松江市職ユニオン地方自治研究集会を開催—島根県本部	丹羽野真也 70
	次号予告・編集部から	72

学技術を進めるよりも、市民への啓発の方が大事」と核物理学研究の職を辞し、原発運動をリードする。

「やられるかもしれない」。これは一九八八年、「天皇の政治責任はある」と長崎市議会で問われて答えた本島等市長が、著者の取材の別れ際、暗い声でぼそつとつぶやいた言葉。そのあと政治テロによって銃撃され瀕死の重傷を負う。

三七人。鶴見俊輔、小田実、井上ひさし、佐多稲子、菅原文太……。社会を背景に発せられた言葉を著者が受け止め、ルポルタージュの方法で描き出した。二〇年から三年間、共同通信を通じて全国の地方新聞で連載された。

花田清輝

三七人の範囲は、著者が大学内の生協機関誌の編集アルバイトをしていた頃から始まって、編集者、ルポライターと六〇数年に及ぶ。一番古い登場人物は花田清

輝。書評子も学生時代夢になつて読んだ記憶があるので懐かしかった。一九六〇年代の都電撤去反対闘争のルポを、花田に、自分で書くようにと言われて著者の人生も決まった。

叛逆老人

本書と並行して鎌田『叛逆老人 怒りのコラム222』(論創社)を読んだ。こちらは東京新聞の連載コラム。たとえば原発への怒りが爆発する。「さようなら原発」集会、壇上には、大江健三郎、坂本龍一、瀬戸内寂聴、と「忘れ得ぬ」の人物が参加している。著者は対座して話を聞いたのではない。ともに現代史に参加しながら、立つて話を引き出したのだろうと思う。

著者の思い出、追慕が胸にしみる。岩波書店が本に栗紐(しおりひも・スピン)をつけてくれた。おしゃれな装丁。

評者 菅原敏夫 本誌編集委員